2010 年秋の森「森のアーティストになろう」について

村上　真由美

０．はじめに

2010 秋のわせだの森は、「森のアーティストになろう」という基本理念で活動を考えた。また作る活動を通して生まれるやりとりを主な学びの場としていくという仕掛けにした。「主な」というのは、森の活動に参加すること自体にもやりとりが生まれ、学びが起きるのではと考えたからである。以下、４つの観点で活動を通して考えたことを述べる。

１．活動内容について－必然性の創出－

第１回　仕掛けカードつくり

　誰にあげるか、どんな場面であげるかを考えグループでやりとりをすることができる。材料を工夫する楽しみがある。実際ファシリテーター(以下ファシ)にプレゼントする場面も見られ、リアリティもあった。

第 2.3 回　カレンダー作り(スタンプ&コラージュの技法で)

グループで共同して作成するので、話し合う必然性が起きる。どの季節(月)が好きかなど自然なやりとりが生まれる可能性がある。また、材料を工夫するという楽しみがあり、参加者の意欲も高まったと考えられる。共有場面では、なぜその月や季節にしたのかを話し合うことができる

第 4.5 回　お弁当づくり

　どんなテーマの弁当かをグループで話し合うことができる。材料を工夫して製作する楽しみがある。弁当に関するストーリーができる。弁当作りは、本物ではないので、「見立て」という作用が働き、想像したものについて話すことができるという利点がある。

第 6.7 回　ハッピーラッキー縁起物

　自分にとっての縁起物やお守りになるものを作った。個人で製作したが、背景となるそれぞれの経験や縁起物となるものについて共有した。そのあとどうしてそれを作ったか話し合いをした。縁起物やお守りとするものがそれぞれのバックグラウンドによって違い、一種のインフォメーションギャップが起きるので､話がしやすい。

第 8.9 回　〇年後の私　本作り

　〇年後のなりたい自分をイメージするという段階を踏んで作る作品。3 枚の絵にするのがイメージなのだが将来の自分を考えるので比較的考えやすい。クイズ形式で発表するので最後まで楽しんで聴く良さがあった。

第 10.11 回　私の行きたい場所へ行く切符作り

　ファシが提示したのは、過去への行きたい場所であった。そこへ行くと見えるものにしたが、難しい面もあったので将来へ行く切符も取り上げて説明した。イメージがわく場合

とそうでない場合があり、抽象的なことを話し合うことに困難を感じる参加者も出ることがある。「個人化」された話が出て、お互いを知り合うという有効性がある。
第 12 回　ミニ製作　まる、さんかく、四角から何つくる？
　見立ての際だったもの。簡単な製作だが､その人らしい話が聞ける。
第 12 回　展覧会
作品を見てメッセージカードを書く。相手意識もあり、作品について感じたことを書くので様々なレベルのことを書くことできる。

　これらに共通していえることは、作品作りという共通の方向にファシや、参加者が向くので何もなしに向かい合ってやりとりをするより､威圧感や緊張感のようなものがとても少ないということである。また、話をする仕掛けとしての製作活動は話す､書くなどの必然性を作りだし、レベルの差があっても､話そう､書こうとする意欲に満ちた参加者の様子を目にすることが多かった。後述する D くんのメッセージカードも必然性のあるところ書く行動が起きるという例として強く印象づけられた。また、初級レベルでも「〇年後のわたし」について長く長く、詳しく自分の将来のなりたいものを話した参加者に感動を覚えた。話すことはレベルの差ではないことを教えられた出来事だった。
　しかし、その取りかかりの良さが、反対に学びを妨げることにもなりやすいので注意が必要である。学校教育の世界でも「活動あって､学びなし」と言うことが言われる。わせだの森でも学びが起きるかどうかは、ファシとそれを支えるスタッフの力量に関わっていて、教室型の学びより難しいと感じることが多かった。
　教室型の学びでも教科書があればいいというものではない。教材が「教材」になるかどうかは学びの場の設定と教師の力量にかかっている。その点では共通しているのだが、力量がより問われるのがこの森の特徴と考えられる。

２．参加者との関わりについて
　なんといっても筆者が一番苦労したのは、参加者との関わりかただった。子どもを教えた経験はあるが、大人を教えた経験がないのでそれが日研に入っての不安材料のひとつだった。
　当初は、製作活動を媒介にできるので何とかなるのではと考えていたが､ファシをやることになって不安が的中した。どのように話していいのか見当もつかない。言葉遣いもわからない。とても緊張してしまった。相手を見て話をしていないと指摘されたので気をつけているのだが、余計に緊張する。そして声も小さくなるという悪循環だった。ことばを選びながら話すのがいけないのだろうと考えた。それで、考えながら話すのは避けるようにしていたが､そうすると意図に反して相手を無視して話すようになる。本当に大変だった。緊張すると参加者がどのような反応をしているのか見えてこない。毎回困った事態に陥った。参加者の様子が見えるようになったのは、森も終わりに近づいたころだった。慣れて

きたのだろうか。そのときたまたま疲れていて余計な力が抜けたからか、今振り返ってもよくわからないのであるが。今いえることは、緊張するとそのような事態に陥ることを受け入れて進んでいくということだと考える。自分の欠点でもあるこの弱さを受け入れて、抱えこんで参加していこうと決意した。この実践を履修するに当たり、「弱さを共有する教室」という意見を出したが、そのとき筆者の頭には参加者のことしかなく、弱さを持ったものが自分という考えにいたっていなかった。弱さを抱えて参加する人の中に自分も入ると気づかされたことだった。これがこの実践を履修しての最大の収穫である。

また、参加者との距離の取り方も難しさの一つだった。製作途中であまり話しかけてもしつこいかと心配したり、逆に距離をとりすぎて参加感がなくなったりした。たとえば、お弁当づくりでの共有場面で「誰が、誰にお祝いの気持ちでそばをあげるのか」よくわからない発言があった。訂正するのも悪いかと思い、質問もしなかったため話がよくわからないまま流れてしまったことがあった。相手を傷つけず、しかも状況がよくわかるように質問してみることができなかった。質問することは、相手にとって関心をもたれているというサインを送ることなのだが、なかなか難しいと感じた。

反対に、距離が近すぎて相手のペースに巻き込まれ、結果的に全体の進行を見失ったこともあった。相手に原因があるのではなく、相手の醸し出す雰囲気が筆者の過去の経験を思い出させ､その過去の経験の世界にがんじがらめになってしまった結果だといえる。こうしてみると経験があるのもそれだけでは良いといえず、経験によって相手や状況を見る目が曇るということにもなるのである。このことは普段から心がけてきたことだが、思いがけず足を取られたことになった。

また、世界情勢が参加者に影響を及ぼしていることを肌で感じた出来事があった。紛争の起こっていることについて森のメンバーでない人が「どうするの？戦争になったら？」と尋ねたことに対してAさんが｢戦争になったら〇〇に集合することになっているんです｡」と答えたやりとりがあった。筆者としては、「A さんに戦争に行ってほしくない。死なないでほしい｡」と強く思い、「一期一会」ということばが頭をよぎった。人間いつも死と隣り合わせで生きていることは頭では理解していても、いざとなるとそれを拒否したいと願った。なぜそうなったかというと自分の身近な人々を亡くしたばかりだったのでその事柄に強く反応したのだと考える。

これらの出来事は、「他者との関わりによって、自分を知る」という文言を地でいくものとなった。いろいろな参加者があり、今までの世界では出会えなかった様々な人々に会うことができたが、その参加者との関わりが自分を見つめ直す作業になったともいえる。

３．参加者の学び

B さんは、初めて参加した日に道に迷ったらしい。らしいというのは、中国語で息せき切って話したからである。日研のわかりやすくはない建物を目指して、いろいろな人に尋ねながらやってきたものと思われる。それも学びのうちとデザイナーはとらえていた。あら

かじめ予想したことだったが、やはり目の前の参加者が、道に迷いながらもきてくれたことには感動を覚えた。またその日は別の二人の参加者も都電の早稲田駅から 3 分というのに「30 分もかかった。」といっていた。それでもくるというのはたいへんなことだ。森という場に参加すること自体がもう学びの第一歩なのだと実感させられた。道を尋ねると言う必然性がここでも起こっていた。必然性のあるところに学びは起きる。そして、「展覧会」の場面でも干支の話から正月の話にいき、最後に成人式の晴れ着の話になった。成人式に普通のジーンスで行ってしまい、とても残念だったという話だった。スーツを持っていないことかと考えたが、そうではなかった。スーツを持っていたのだが準備として情報を得るのを忘れたという。そのことを母親に注意されたということだった。とても残念そうで「春節にスーツを着てみんなで写真を撮れば」と提案してみたがそれではだめそうだった。一回きりの行事に晴れ着を着なかったことと、友達と写真を撮れなかったことが残念なのだろうと察せられた。B さんは、話をしたいので森にやってきたと言うことがよくわかった。そして、展覧会の作品が話のきっかけとして作用したこともよくわかった。

また C さんは、なりたい自分について話そうとする意欲が満々の話し方だった。わからないところは英語のできる人に聞きながら、一生懸命話していた。今勉強していること、国に帰ったらやりたいこと、そのために必要なことなど初級レベルとは思えない話し方だった。モチベーションの問題もあるが、それを起こさせる場の重要性を痛感した。

４．D くんについて

D くんは、1 月に日本に来たばかりの小学生である。中学校に入る前に集中的に日本語を学んでいた。シャワーのように日本語を浴びているだろうことはその様子から想像できた。回を重ねるごとに発音がクリアーになり、使える語彙数も増えていた。周りのやりとりのなかで活動に参加できるようになり、「今日は、〇〇ができた。」と親のような喜び方を振り返りのなかですることもあった。D くんにとって森は日本語を使う場になっていることはいろいろなことからわかる。

まず、確認のための電話である。最初は親戚の人や教師が送り迎えをしていたが、しだいに一人で来たり帰ったりすることができるようになった。都電の駅に着いたことを知らせる電話は、最初は発話なしだった。それがだんだん「もしもし、D です。」といえるようになり、日本語でのやりとりが増えていった。無事に帰宅したことを伝えるための確認の電話もできるようになった。

活動では、サブファシのスキャホールディングにより、「行きたいところへ行く切符」を作ることができた。問いと答えによる話を進めるという方法の有効性を今回まなぶことができた。

S：D くんは、どこへ行きたいですか？

D：杭州（hangzhou）

S：こうしゅうだね。

D：東京から杭州（こうしゅう）へ行きます。
S：それからどうするの？
D：車
S：車でどこへいくの？
D：西湖。西湖へいきます。

また、書く場面では、展覧会のメッセージカードをサブファシとやりとりしながら書くことができた。まず､気に入った作品を選んだ。次にどこがいいのか考えることができた。そして次のような文ができた。

「ゆきが　かは（ママ）いいです。プレゼント　イイ（ママ）です。」

聞くところによると、ひらがな、カタカナは練習場面では習得が十分ではないという。やはり書く必要や書こうとする場を作り出すことが必要と考えられる。

５．おわりに

製作活動を取り入れた場作りは、やりとりを生む必然性の創出となった。しかし、場作りをすれば事足りる訳ではない。そこに､質問する、よく聞く、相手の言ったことを言い換える、繰り返す、確かめるなどのスキャホールディングが必要であることがわかった。これが、ファシの主な役目である。どんな時に支援が必要か見極めることも大事な力量の一部である。

参考文献

池上摩希子（2009）「「教室」の解体が創出するもの「にほんご　わせだの森」の実践から考える対話の可能性」小林ミナ・衣川隆生編『日本語教育の過去・現在・未来、第３巻「教室」』凡人社 pp161－179

実の場：国語教育辞典（2001）p198